

第 80 回講演会＜2026 年 7 月 3 日開催＞

Reframing the ‘Pains of Imprisonment’ : Solidarity, Justice, and Incarcerated Women in the Philippines

Imelda Deinla（執筆＝高橋 麻奈）

■ 講演者……Imelda Deinla

(Senior Lecturer, University of New England,
Faculty of Law / Visiting Fellow, Faculty of
Global Liberal Arts, Kanda University of
International Studies)

■ 司 会……高橋 麻奈（本学 グローバル・
リベラルアーツ学部 准教授）

■使用言語……英語

人生の中で刑務所に「収監される」ということは、人生にどのような影響を及ぼすのだろうか。それは収監された本人のみならず、家族や友人などの周囲の人々、あるいはその人が生きる社会やコミュニティに対して、どのような痛み、喜び、そして変化をもたらすのだろうか。

「収監されること」の意味については、これまで様々な先行研究がなされてきた。しかし、



講師のイメルダ・デインラ氏

アメリカの犯罪学者グレシャム・サイクス（1958）が提唱した「収監の痛み（Pains of Imprisonment）」をはじめとする西洋の犯罪学的枠組みは、「グローバル・サウス」におけるジェンダーに起因する微妙な差異を見落としている。こうした点を踏まえ、講演者のイメルダ・デインラ氏はフィリピンをフィールドとし、収監されたフィリピン人女性特有の苦痛を調査してきた。本講演は、デインラ氏がフィリピン・マニラ首都圏（Metro Manila）において実施した法社会学（Socio-legal Studies）的調査をもとに、フィリピンの刑務所制度下における未判決女性たちの生きた実態について考察するものであった。

「収監の痛み」に対する新たな視点

フィリピン社会の中で生きる女性たちは、多様な役割を担っている。彼女たちのアイデンティティは単なる母性にとどまらず、家族内での生計維持者や大黒柱としての本質的な役割によっても定義される。そのため、公判前拘禁が長期化することは、家族・親族間のネットワーク全体を不安定化させてしまう。つまり、女性たちが「収監される」ことがもたらす苦痛は、刑務所の「内」と「外」に不可分に結びつき、深刻な影響を広く及ぼしているのである。

こうした深刻かつ多重に重なり合う苦痛にもかかわらず、デインラ氏の調査は、フィリピン人女性たちが並外れた回復力を示しているという事実を明らかにした。講演では、実

際に収監されている女性たちの「声」が、個々のナラティブとともに紹介された。それらは必ずしも「収監された」という事実を否定的に捉えるものばかりではない。新たなコミュニティや人間関係、異なる背景・信条を超えた思いやりや共感の構築など、建設的・肯定的な影響をも女性たちの人生にもたらしめている実態が示された。中には、刑務所内で高校を卒業するという自己啓発・自己研鑽に励む姿や、家族を支援し続けコミュニティ内でリーダーシップを発揮する事例も紹介された。

こうした女性たちの集団的な連帯や、「damayan（相互の思いやり）」、「bayanihan（共同体の結束）」といった文化的慣習によって、収監に伴う「社会的な死」に積極的に抵抗している女性たちの姿が浮き彫りとなった。デインラ氏はこうしたインパクトを6つの形態に整理し、収監中の女性に見られる独特な連帯能力が、トラウマを和らげるだけでなく、最終的には釈放後の地域社会への円滑な再統合に向けた強固な基盤を築くものであると結論付けた。

フィリピンの社会的文脈が浮き彫りにした「女性が収監されること」の社会的インパクト

デインラ氏の講演後には、参加者から数多くの質問が寄せられた。「なぜ、刑務所にいながら高校を卒業できるのか?」「収監された者同士が交流し、宗教や信条を超えて共感し合



司会の高橋先生

えるのはなぜか?」「人々は何を『正義』と捉えているのか?」「コミュニティにおける非公式な司法システムの役割とは何か?」など、核心を突く質問が相次ぎ、非常に充実したディスカッションとなった。

これらの質問が上がった背景には、日本や西洋諸国の人々がイメージする「収監されること」と、フィリピン社会における刑務所のあり方との間に大きなギャップが存在することが挙げられる。フィリピンにおける刑務所は決して完全に閉鎖された空間ではなく、より柔軟で寛容な運営がなされている実態が議論を通じて明らかになった。本講演とディスカッションは、それぞれの社会における「刑務所が持つ意義」を再考する貴重な機会ともなった。



会場の様子（クリスタルホール）